12/1 福井

敦賀2号

1次冷却水10人浴びる

点検作業時噴出 被ばくなし

30日午前10時50分ごろ、定期検査中の日本原電敦賀原発2号機（加圧水型軽水炉、出力116万キロワット）の原子炉補助建屋地下2階（管理区域）で、配管の弁の点検作業中、配管内にあった1次冷却水が噴出し、協力会社4社の作業員10人が放射能を含んだ水を浴びた。原電によると、作業員はすぐに洗い落とすなどして、被ばくはなかったという。環境への影響もないとしている。

（坂下享、青木伸方）

敦賀原発では過去にも作業員に放射能を含んだ水が掛かったトラブルはあるが、10人が一度に浴びるのは異例。

作業員がすぐさま現場を離れたため、配管内にたまっていた水が全て漏れたとみられ、最大160リットルの推定。水に含まれる放射能量は27万2千ベクレルで、国への報告基準（370万ベクレル）の10分の1程度という。水は拭き取って回収した。

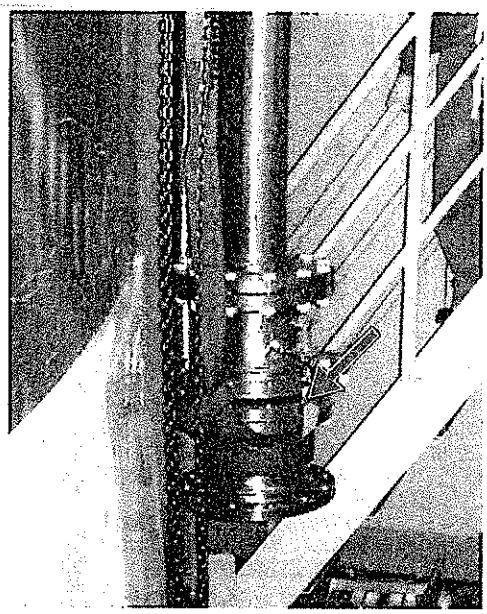
原電によると、1次冷却水を一時的にためる貯蔵タンク室内の配管の弁を分解点検するため、床から高さ約1メートルにあるつなぎ目のボルトを外す作業をしていた際、配管に残っていた水が霧状に噴き出した。室内にいた作業員15人のうち、周囲2メートルほどの範囲で作業していた10人の顔や作業服、足元などに水が掛かった。

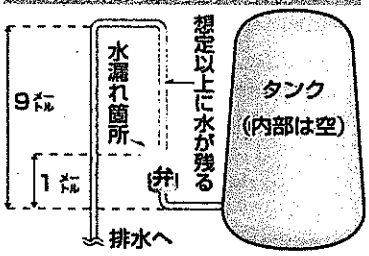
10人は18歳から60歳までの男性で、放射線量測定器などで調べた結果、身体汚染や体内への放射性物質の取り込みはないとしている。

配管は垂直方向に設置され、弁から高さ最大8メートルの位置まで水がたまっていた可能性があり、つなぎ目を緩めた際、水圧の影響で噴き出したとみられる。作業では、たまり水を回収する受け皿（容量20リットル）や飛散防止のシートを使っていたが、原電は「配管に想定以上の水が残っていた」とし、詳しい原因を調べている。弁の分解点検は運転開始以来初めての作業だった。

小林敏・敦賀発電所副所長は「作業員の安全に関わり、非常に問題があると認識している。原因究明し再発防止に努めたい」と話している。

敦賀2号機は原子力規制委員会の新規制基準に基づく審査中で、原電は再稼働を目指している。



1次冷却水が噴出し、協力会社の作業員10人が浴びた配管の弁のつなぎ目（矢印部分）＝30日、敦賀市明神町の敦賀原発2号機（原電提供）

敦賀原発2号機の水漏れ